

# 生まれ変わるタイ映画

## 魂のホームステイと救済

日時：2019年3月14日(木)

場所：国立国際美術館

主催：京都大学東南アジア地域研究研究所／混成アジア映画研究会／  
大阪映像文化振興事業実行委員会(大阪アジア映画祭)

協力：国立国際美術館

**山本博之(司会)** ● 私たち混成アジア映画研究会は、主に東南アジアを対象に、映画を通じてその国の社会や文化や歴史について知り、また、その国について理解を深めることで映画をより深く愉しむというコンセプトで上映会やシンポジウムを行っています。大阪アジア映画祭の期間中には、毎年映画祭との共催で、東南アジア映画の監督や出演者を招いてシンポジウムを行っています。今回は、タイの『ホームステイ』のパークプム・ウォンプム監督をお迎えして、『ホームステイ』を中心に、タイ映画についてディスカッションしたいと思います。

はじめにお断りしておきます。『ホームステイ』はこれまでに何度か映画になっていますが、ご覧になった方はいらっしゃるでしょうか。『ホームステイ』には謎解きの要素があるので、ご覧になる前に核心の部分を知りたくない方もおられると思います。そうは言っても、映画の内容にまったく触れずにシンポジウムを進めることもできませんので、今日は、物語の核心の部分には触れないけれど、結末に近いところまで触れる可能性があるということをお断りしておきます。

それでは、はじめにパークプム監督からごあいさつをお願いします。

**パークプム・ウォンプム監督** ● みなさんこんにちは。日本で映画のシンポジウムに参加してお話することができて、とてもうれしいです。『ホームステイ』は日本の文学をタイで映画化した作品です。それを日本の方たちにご覧いただくのはすごくワクワクしていて、みなさんの感想にとっても興味があります。

**山本** ● ディスカッションは、京都大学東南アジア地域研究研究所の連携准教授で、タイの地域研究の立場

から映画を研究している平松秀樹さんです。

**平松秀樹** ● 私は比較文学・比較文化、タイ文学・タイ文化を専門に研究しております。本日は、混成アジア映画研究会のメンバーの1人としてタイから監督をシンポジウムにお招きすることができてたいへん光栄に思います。

私はタイのチューラーロンコーン大学の文学部の大学院で勉強して、その後、タイの大学で教える機会に恵まれました。タイ滞在は10年になります。現在も、集中講義のかたちでタイの大学で教えています。

ここ何年かは、1年のうち半分ぐらいタイにいて、映画やミュージカル、テレビドラマを一日10時間ぐらい見て過ごしています。

**山本** ● タイの映像関係をたくさん見ていて、タイの小説もたくさん読んでいる人です。国際交流基金アジアセンターのフェローとしてタイで調査したこともあるそうですね。

**平松** ● 2018年にアジアフェローという奨学金をいただきました。1927年から始まるタイの商業映画をすべて観るという野望をもって、タイのフィルムアーカイブに通い始めました。今でも通っています。

**山本** ● タイのテレビドラマや映画をたくさん観ている平松さんに、『ホームステイ』に限らず、タイの映画やドラマの魅力について話していただきましょう。

### ふんだんなコメディ要素に 都会的センスが加わった近年のタイ映画

**平松** ● タイ映画の魅力は、ホラーであれ、コメディであれ、社会批判の映画であれ、タイ社会に流れる基本概念が具体的に見てとれるところです。



タイにはおもしろくて笑える映画が多くて、それも魅力の一つです。20世紀前半から現在に至るまで、タイではコメディ要素が強く入っている映画が多いです。観客からすると、映画を観に行った以上、存分に笑って帰るのが当たり前といった感じです。

しかし近年のタイ映画に関して言えば、コメディ要素だけでなく、洗練されたおしゃれな要素が加味されている点が魅力です。最近の映画は、映像技術の革新だけでなく、都会的なセンスに溢れる作品が多くなっています。それを牽引してきたのが、タイの映画制作会社であるGTH社（現在は名前が変わってGDH559社）であることは言うまでもありません。

日本の往年のタイ映画ファンは、タイ映画にローカル色や泥臭さを期待するかもしれません。その一方で、近年の作品から見始めたタイ映画ファンには、ユニヴァーサルな都会的センスに魅了されている人も多いと思います。私が日本で教えている私立大学の学生で、タイにあまり関係していない学生には、タイは現在でもゾウが闊歩するような、『Dr.スランプ アラレちゃん』に出てくる「ペンギン村」、あるいはお菓子のテレビコマーシャルに出てくる「おらが村」のようなどかな社会だと思っている人がけっこういます。そのような学生たちも、近年のタイ映画を観ると認識を新たにして、タイは洗練された都会だと思ってくれます。

都会的なセンスを持つタイ映画が生まれた社会背景として、BTSスカイトレインの登場があると思

います。BTSの電車内では、おしゃれなスニーカーを履いて、村上春樹やハリーポッターの本を小脇に抱えた若者が増えました。最初はビーチサンダルで電車に乗ってくる人もいましたが、やがて淘汰されて、おしゃれなジーンズとスニーカーを身につけて、頭も茶髪になって、だんだんおしゃれな感じになっていったと感じます。

**山本**●平松さんは、ローカル色豊かな、泥臭さのあるタイ映画から入ったんですか。

**平松**●私は都会のセンス溢れるタイ映画から入って、そこから遡及して過去の作品を観ていきました。BTSが登場したころに私もタイ映画デビューして、そこからタイ映画を観るようになりました。

### 権利取得から脚本執筆、撮影・完成まで10年以上を費やした『ホームステイ』

**山本**●続いて『ホームステイ』の話に入ります。パークブム監督に『ホームステイ』の制作の背景について伺います。最初にお話があったように、日本の小説を原作にしている、タイで映画にするときの内容を変えたりするなど、工夫や苦労があったと思います。

**パークブム・ウォンプム監督**●ももとは、GTHのプロデューサーが『カラフル』という小説を読んで、ぜひ映画化したいと思ったことがきっかけです。ですが、当時は日本の文学をタイで映画化した例が一つもなくて、手続が非常にたいへんでした。

権利元に連絡をしたら、「映画化の権利は売らない」

と作者に言われました。一度は権利元に断られたのですが、あきらめずに努力しました。GTHの人が日本を訪れて話をしたり、どんな映画を撮ってきたかというプロフィールを説明したりしました。そして作者にGTHの映画を観ていただいたところ、気に入ってくださって映画化の許可が下りました。

作者は『カラフル』という作品をすごく愛していらっしゃって、どこの誰かわからないタイ人に映画化したいと言われても許可しなかったということのようです。しかし、最終的に私たちの熱意を感じて許可をくださいました。映画化の権利を得るまでに5年かかりました。

『ホームステイ』はとても長い時間をかけて作った作品です。許可を得るまでも長い時間がかかりましたが、最終的に、うちの会社で制作にもっとも長い時間がかかった作品になりました。GTHという社名がGDH559になってからも制作の準備が続いて、10年以上かけてやっと完成しました。

脚本も複数の脚本家を使いました。最初に担当した人は、1年かけて脚本を描くと言って雲隠れしてしまいました。(笑) 本当にまったくの雲隠れで、電話しても電話をとらないし、会社の人の冠婚葬祭にも一切出てこない。いいものを書きたいと言って隠れてしまいました。最終的にその脚本家は、いいものが描けないのでこのプロジェクトを降りると言ってきました。うまく描ける自信がなかったということです。私たちはプロジェクトを引き継いでやり直すことになりました。

このプロジェクトのことは私も社内で前から聞いていましたし、私も小説を読んで、この小説を映画化したらすごく感動的な話になるだろうなと思っていました。でも、私が監督するとはまったく思っていませんでした。私はこれまでホラー映画を撮ってきたので、会社からこの作品を監督してほしいと言われたときには、なぜ選ばれたんだろうと思ってすごくびっくりしました。というのも、私はそれまで、『心霊写真(SHUTTER)』とか『Alone』とか『Phobia(4bia)』の1、2など、ホラーばかり撮ってきたからです。ですが、これを私が監督するのはすごく挑戦的なことで、ぜひやってみたいと思いました。

一人目の脚本家を引き継いで、脚本を描きあげるのに14か月かかりました。複数の脚本家を使いました。脚本を描くのがうまい脚本家も、若い脚本家も使いま



パークプム・ウォンプム氏(『ホームステイ』監督)

した。ベテランの脚本家だと、タイ映画でハリウッド映画化された『レベル13』の脚本家もいました。短編映画で世界中の映画祭で賞をもらっている脚本家もいました。月曜日から金曜日まで毎日喧嘩のように議論を重ねて、14か月という長い時間をかけて脚本が完成しました。

映画化にあたっては、原作の要素の一つも落とさないことを心がけました。ただし、小説では主人公の語りかけるような口調によってストーリーが進むのですが、それをそのまま映画のシチュエーションに落とすのは難しかったので、そこは変えました。また、日本の社会とタイの社会とは違うので、タイ社会の習慣に合うようにアレンジした部分がかなりあります。ただしシーンの肝になる部分は変えないようにしました。

10年以上になる私の映画制作のキャリアのなかで、この映画の脚本を描くのが一番たいへんで、でも一番楽しかったです。脚本家も私自身も、人生の一部を脚本に反映しています。たとえば私と母との関係もこの映画に反映されています。映画化にかかった3年間は、私とこの映画との絆をすごく深いものにしてくれました。

### タイにおける若者の自殺の現状と『ホームステイ』が目指したもの

山本●監督に選ばれたときになぜ自分が選ばれたのかと思ったと言われましたが、会社がなぜパークプム監督を選んだのかという説明はあったんですか。

パークプム・ウォンプム監督●プロデューサーから



は、この映画を語れる監督ではないかと思ったからと言われました。その前に、『Inside Out』というアニメーションを観ていて、それは若者が自殺する話だったのですが、それを観た感想をプロデューサーに話したことがありました。その話を聞いたプロデューサーに、そういう視点を持っているならやれるんじゃないか、やってみてほしいと言われました。それから、たまにはラブ・ストーリーも撮ってみたらとも言われました。(笑)

**山本**●自殺の話が出たのでお聞きしますが、この作品には若者の自殺が描かれています。『パッド・ジーニアス』はタイで受験戦争が厳しいことが背景に作られたのだらうと思います。『ホームステイ』が作られた背景として、タイで若者の自殺が社会問題になっているということがあるんでしょうか。それとも、自殺が出てくるのは原作にそうあったためで、タイでは自殺がそれほど問題になっていないということでしょうか。

**パークプム・ウォンプム監督**●タイでも自殺は問題ではありますし、増えてはいるのですが、そこまで大きい問題にはなっていません。この映画も、自殺のことだけではなくて、もっと広い層に届くようなものにしたと思います。たとえば人生の真実とはどのようなものかについて考えるきっかけになってほしかったのです。映画を観て愉しんで、あわせてそういうことも考えて帰ってもらえれば意義があるだろうと思いました。

### 映画好きが高じて映画学校に進み 日本のホラー『リング』に影響を受ける

**山本**●これまでホラー映画を撮ってきて、たまには恋愛映画を撮ってもいいんじゃないかと言われたというお話でしたが、監督が映画を作るようになった経験を紹介していただけますか。

**パークプム・ウォンプム監督**●きっかけは塾をサボったことです。塾に行かされていて、塾の授業が2時間だったので、サボって映画を観るのにちょうどよかったのです。毎日、母に内緒で映画を観ていました。そのうちに映画が大好きになっていって、もともとはインテリアを勉強しようと思っていたのですが、映画監督になりたくなくて、映画を学びたいと言ったら母は驚いていました。

映画学科に入って短編映画をたくさん撮ったのですが、撮りながらやっぱり自分は映画を撮るのが好きだなとさらに実感しました。そのうち私の短篇映画が賞を獲って、世界中の映画祭で上映されたのです。それで、これなら映画会社に応募しても楽勝で受かるなと思って受けたら、一つも受かりませんでした。(笑)そこでCM制作の会社に応募して、受かってCMを撮っていたんです。そのCM制作会社が映画を撮ることになったとき、私が海外の映画が好きだということが知られていたので、映画を撮らないかと言われました。

そのあと1年間かけて『心霊写真(SHUTTER)』という作品の脚本を描きました。これは共同監督作品で、撮影した当時の私は24歳でした。まだ若かったです。初監督作ということでビビっていたところもあるのですが、何も知らないということは逆によく、映画制作に全力を投球しました。そのあと次々と映画を撮る機会があって今日に至ります。

**山本**●ホラーが好きなんですね。

**パークプム・ウォンプム監督**●もともと日本映画の影響を受けています。CMの助監督をしていた頃に『リング』が流行って、なぜ日本のホラー映画はこんなに怖いだらうと思いました。日本のホラー映画の影響は強く受けています。ちょうどその頃にホラー映画がすごく流行っていて、『シックス・センス』など他の作品もあったので、ホラーもいいなと思いました。

ただし、もともとホラーが好きだったわけではありません。初監督作品を撮るときも、いろいろプロジェクトがあったのですが、CM会社のプロデューサーが、私のホラー映画のプロジェクトがいいと言って選んでくれたのです。撮ってみると、ホラー映画は映像や音や光といった映画の言語を駆使するというのがわかってきて、撮ることでホラー映画がすごく好きになって、またホラー映画を撮りたいと思って何本も撮りました。

### 成功と不振の二極化、制作期間の長期化、寡作化 ——タイ映画をめぐる制作環境

**山本**●GTHは大きな会社だと思いますが、タイでは、大きな会社で売れるようなものを作るという映画の作り方と、あまりお金がかけられないけれども自分の作りたいものを作る作り方というように二つに分か

れているのでしょうか。

**パークプム・ウォンプム監督** ● タイ映画業界全体を見ると、現在は暗闇の時代です。一時期タイ映画は復活した時代があるのですが、現在は、GDHも他の映画会社も、暗闇の時代に戻ってしまいました。タイ映画の観客数も減っています。売れる映画は売れますが、売れない映画は売れないという構造になっています。以前は、5,000万バーツとか7,000万バーツという中ぐらの興行収入を上げる映画がありました。そういう映画を作れば、なんとか次の作品を作る資力が得られます。でも、観客が観ない映画もあるので、制作会社の閉鎖もけっこう増えています。

GDHはたしかにすごいと言われますが、いい映画を撮れるのは1年にせいぜい2本程度です。なぜ映画をもっと撮らないのかという意見もありますが、2本というのは、本当に自分たちの考えや経験を入れて、すごく気を配って、数年かけて作っている作品の数です。ヒットする要素はあるのですが、必ずしもヒットする保証はありません。観客にどのように観てもらえるかということも一つの要素になります。

**平松** ● タイには、1分や2分で泣かせるようなすばらしいCMがたくさんあります。パークプム監督はどのようなCMを作っていたのでしょうか。

**パークプム・ウォンプム監督** ● じつは、私はCMを撮っていないんです。助監督を2年続けて、撮ったらと言われたのですが断りました。タイでもっとも有名なCMの監督がいる会社にいたのですが、時間をかけて撮る映画のほうが好きだと思ったので断りました。

**平松** ● CMの会社が映画のスポンサーになっているけれども、監督はCMを作らなかったということですか。

**パークプム・ウォンプム監督** ● 広告会社が発案の企画ですが、広告会社が出資したのではなく、グラミー (Grammy) という別のエンターテインメントの会社が出資しました。グラミーの「G」がGTHやGDHの「G」です。

**山本** ● GTHの映画が始まるときには「Gross Domestic Happiness」という言葉が出てきますね。

**パークプム・ウォンプム監督** ● 映画を観た人が、GTHの映画は観ているとすごく気分がよくなる、笑わせてもらったり幸せな気持ちをもたらしたりすると思いいなと思って、社名を考えたときに、Gross Domestic Happiness——国内幸福指数と合っているから、この



平松秀樹氏 (京都大学東南アジア地域研究研究所)

名前にしようということになりました。

**平松** ● 私は文学も研究していますが、『リング』の翻訳がタイの翻訳出版界にとって大きな起爆剤となって、それ以降日本の文学がたくさん出版されるようになったことを憶えています。『リング』にすごく影響を受けたというパークプム監督のいまのお話で、映画における『リング』の役割も再認識しました。

**パークプム・ウォンプム監督** ● 『リング』はタイの映画や小説を読む人に影響を与えただけでなく、世界中の人に影響を与えたと思います。ホラー映画はこれほど怖いのだと。私も『リング』の影響を受けていることはまったく否定できません。絶対に影響を受けていると思います。

### ロマンティック・コメディとサスペンスがGDH作品の二本柱となるか

**山本** ● 先ほどからの発言でもわかるように、平松さんはタイの映画やテレビドラマや小説など、タイのありとあらゆる物語を観ている人です。ここからは平松さんに、タイ映画の他の作品とも比べながら、『ホームステイ』の見どころを紹介していただきましょう。

**平松** ● 『ホームステイ』の見どころの一つは、都会的なセンスが描かれていることです。バンコクという大都会の現代高校生ライフを通して、タイ映画の最新性が感じられます。原作を読んだ方は、日本社会の問題がタイ社会におけるさまざまかたちに置き換わっている点、すなわち原作との比較もたいへん愉しめると思います。原作の『カラフル』はタイ語の翻訳も出版されています。

『ホームステイ』でもう一つ注目されるのは、この10年ほどタイ映画界で全盛を誇っているロマンティック・コメディとの差異です。これまでのGDH社のロマンティック・コメディとはかなり趣が違います。『ホームステイ』は全編がサスペンス調で進みます。重い雰囲気もずっと漂っています。コメディ要素を抑えている原因として、日本の観客は、タイ国王ラーマ9世の崩御と関係あるのではないかと思う方もいらっしゃるかもしれません。

GDH社作品で日本でもヒットした『バッド・ジーニアス』もサスペンス調でした。『ホームステイ』は『バッド・ジーニアス』を意識しているのかということも、多くの人が知りたいところだと思います。

ちなみに、タイでは先月からGDH社の『Friend Zone』が上映されています。私も2週間前に観てきました。これもとてもいい映画で、観客動員も順調のようです。こちらは全編ロマンティック・コメディです。GDH社は、サスペンスとロマンティック・コメディの二本立てという方向性があるのかなと想像しています。

**パークプム・ウォンプム監督**●会社は映画を撮るときに、最初からはっきりジャンルを決めていないんです。今回はロマンティック・コメディを撮ろうとか、サスペンスを撮ろうということは決めていません。どんな監督が撮るかによってテーマやジャンルが決まってきます。ロマンティック・コメディが得意な監督が撮ればそうなるし、『バッド・ジーニアス』の作風も、監督の性格がそのまま表れています。どのジャンルが儲かるかということも一概には言えません。もしかしたら『Friend Zone』だって儲からないかもしれません。

GDHのなかでも、『バッド・ジーニアス』や『ホームステイ』の作風は、ある種の賭けでした。だって、カンニングの映画を誰が観たいと思いますか。(笑)『ホームステイ』だって、ものすごいドラマの映画だし、だいじょうぶかなと思いました。でも、私はこの話を語りたかったし、ぜひこの映画を撮りたいと思いました。

『ホームステイ』を撮る前に、ジラ・マリクンというプロデューサーに『ホームステイ』は儲かるかなと尋ねられました。私は映画を撮るときに儲かるかどうかを考えたことは一度もありませんと答えたら、よし、撮りなさいと言われました。

**平松**●リスクの大きいなか、よくがんばって撮ってくださいました。(笑)

### 重厚な物語のなかに設けられた複数のカタルシス ——『ホームステイ』が拓いた新たな可能性

**平松**●続いて『ホームステイ』の魅力についてお話ししたいと思います。まず、若いヒーローとヒロインがこの映画の魅力です。ヒーローは『バッド・ジーニアス』に出ていた俳優で、ヒロインは今をときめくBNK48のキャプテンのチャープラン・アーリークンです。タイで劇場公開された最初の週は、チャープラン見たさにBNK48ファンの「オータ」すなわちオタクが映画館に詰めかけて、すごい状態でした。

『ホームステイ』は、サスペンス調でテーマも重く、コメディ要素は最大限抑制されています。はじめに述べたような、観客が映画を観て笑いころげてストレスを発散するというタイプの娯楽とは少し趣を異にしています。往年のタイ映画には、テーマが重くてカタルシスもなく、主人公が最後まで救われない社会派映画がけっこうありました。『ホームステイ』はそうではなく、テーマは重いですが途中で何度かカタルシスを覚えるという作風で、新しさを感じました。主人公が生まれ変わるだけでなく、この映画によってタイ映画も生まれ変わる可能性を秘めているのではないかと思います。

個人的に感動した点として、『ホームステイ』の肝心な場面でバッハの「G線上のアリア」が使われていたことが新鮮でした。これまでのタイ映画であまり出逢わなかった演出なので胸を打たれました。バッハの曲を聴くと脳にアルファ波が流れると聞きます。緊張した展開のサスペンスのなかにしばしホッとする瞬間があり、緊迫したストーリー進行のなかでバッハの曲が流れて、心が洗われるようでした。

**パークプム・ウォンプム監督**●クラシックの曲を使ったのは、映画の編集者の影響が大きいです。編集者がすごくクラシックが好きで、ピアノ曲も使いました。なぜだか知りませんが、私も編集室から家に帰る車の中で毎日クラシック音楽をかけていました。最初、あまりにもクラシック音楽をたくさん使いすぎたので、プロデューサーから使いすぎだから一部とったほうがいいんじゃないかと言われました。でも、やはりクラシックが映画の雰囲気によく合っていたの



です。一度使うのをやめたシーンがあるのですが、プロデューサーが見直して、やっぱりここはあの曲がいいんじゃないかと言ったのが、もともと入っていた曲でした。

**平松** ●エンディングロールでも「G線上のアリア」がずっと流れていて、もっとも重要視されているからかと思いました。

**パークプム・ウォンプム監督** ●あの曲が自分たちの気持ちを伝えるのにぴったりだと思ったので、エンド・クレジットにも使いました。タイ映画ではエンド・クレジットにオリジナルの挿入歌を使うことが多いのですが、今回はそういう曲は似合わないと思ったのであの曲を入れました。

### 『ホームステイ』にみる仏教的要素① ——今生の幸不幸を決める因果応報

**山本** ●先ほど監督が『ホームステイ』を作っているときにお母さんとの関係を思い出しながら撮ったという話をされていました。それは親孝行などの仏教的な感覚とも通じるものかと思います。平松さんはタイの仏教もご専門ですが、タイの仏教は日本の仏教と同じものと考えてよいでしょうか。

**平松** ●タイの仏教はテーラワダ仏教と言って、日本語で言うと南方上座部仏教です。上座部仏教では、出家者（比丘）は227の戒律を守らなければいけません。もちろん酒は飲んではいけません。性的行為をしてもだめです。正午以降はご飯を食べてもいけません。他にもさまざまあって、たとえば走ってはいけません。走ったら戒律違反なんです。最終電車がホームに入っているのに走ってはいけません。ゆっくり歩いて乗り遅れるというのが大事な戒律です。（笑）

**山本** ●映画の中で髪の毛を剃った人が走っていましたが、あれはお坊さんじゃないからですか。

**平松** ●あれはお坊さん（比丘）ではありません。

上座部仏教のことをかっつては小乗仏教という人もいましたが、小乗という言い方は差別的で現在は使わないので、上座部仏教と呼びます。ちなみに日本や中国は大乗仏教で、同じ仏教でもかなり内容が違います。

**山本** ●平松さんもタイで出家したそうですね。

**平松** ●私も大学院に入る前に、タイで2年間出家しました。私が出家していたお寺は厳しくて、食事は1日1回だけでした。やさしいところは2食なんです。



山本博之氏（京都大学東南アジア地域研究研究所）

1食でも2食でも、いずれにしても正午までに終えなくてははいけません。出家修行で学んだ経験が、現在にいたるまで私がタイの社会を見つめる基本となっています。仏教はタイ社会を見つめるうえで大事な要素で、タイと仏教とは切り離せないものです。

そうした目で映画を眺めてみると、映画のなかにも仏教的要素が強く表れています。監督が意図して仏教的要素を打ち出す場合もあるし、監督が意図せず映画を作っても自然と仏教的要素が浮かび上がっている場合もあります。

先ほども申しましたが、私は2018年からタイのフィルムアーカイブに通っていて、1927年のタイ最初の商業映画作品からの全作品を視聴することになっています。まだ5分の1も終わっていませんが、タイ映画には、ジャンルを問わず、仏教的要素がにじみ出ている作品が多いことを再確認しました。

**山本** ●親孝行や因果応報は『ホームステイ』の中心的なテーマですね。ここで、核心の部分は伏せて『ホームステイ』の内容を確認しておきましょう。大きな過ちを犯して死んだ人の魂が、ミンという自殺した青年の体に入ってミンとして生まれ変わり、ミンがなぜ自殺したのかを明らかにするというタスクを背負います。主人公の魂がミンの人生を暮らしていく過程で、父親との関係、お兄さんとの関係、学校の友だちとの関係などをいろいろ考えていき、そのうちに、じつは母親との関係にも不満があったことがわかってきます。

映画のなかでお母さんが息子に、「私はよい母親ではなかったけど、あなたは私の息子だった」、「私はよ

い母親ではないから、違うお母さんの子どもになっていいんだよ」と言います。すると主人公は「それでも、ぼくはそういうお母さんの子どもでいたい」と言います。この場面を心で掴まれた人も多いだろうと思いますが、私たち日本の観客が感じるのよりも、タイの文脈に置いた方がいっそう重みを持っているのではないかと思います。親孝行や因果応報も含めて平松さんに解説していただければと思います。

**平松**●因果応報に関して、タイでは今生の幸不幸は前世の行いの結果と考えられています。ただしホラー映画では、今生の悪行の結果が今生でふりかかってくる場合も多いです。パークナム監督のホラー映画『心霊写真』では、今生で行った悪い行いが今生で返ってきます。ホラー以外の映画では、今生でふりかかるのは前世の行いの結果であることが一般的です。

『ホームステイ』は、自殺した人の魂がミンの体に入ってもう一度苦しまなければならないという、これまでのタイ映画ではあまりなかった設定です。ホラー映画以外では珍しい設定ではないかと思います。

### 『ホームステイ』にみる仏教的要素② ——「報恩」と母への至高の愛

**平松**●『ホームステイ』の後半では、母への愛が特に強く映し出されています。タイには親孝行の考え方が強くあります。親孝行と言っても儒教的な考え方ではなく、上座部仏教の「ガタンユー（報恩）」という言葉で表される考えのことで、ガタンユーは、タイの新米僧が習う教科書にも入っていますし、お坊さんもガタンユーを強調して記事を書いたりします。

上座部仏教では、阿羅漢（「悟った人」）や親を殺すことは大罪です。他の殺人と違って重い意味を持ちます。大きな悪業を積んだことになり、その報いも大きく、単なる殺人とは区別されます。また、親から「親不孝もの」と呼ばれることは、子にとってもっともつらいことです。タイの学生に聞いてみると、みんな親不孝と言われるのは非常につらいと言います。一方、親の悪口を言われることは最大級の侮辱です。「お前の父は死んだ」は、タイでは最大級の侮辱で、滅多に言うてはいけない言葉です。

タイで話題になったテレビドラマに『トーン・ヌア・ガオ——純金』という作品があります。病気になったアル中の母親に、親不孝になりたくないなら酒を持っ

てこいと言われて、泥棒してでも酒を届けて親孝行をなす少年が登場します。少年は仕方なしに泥棒するのですが、タイの人であれば、親孝行の心が入っていますから、盗んだことを一方的に悪いと言い切れないと思うはずです。

それから、息子が得度することは、親、とくに出家できない母親に徳を回向することになります。タイでは男は出家できますが女は出家できません。映画『Dang Bireley's and Young Gangsters』では、中華系のギャングである主人公が悪事をたくさんしますが、最後に母のために出家を決意します。ところが得度式で行列しているときに敵のマフィアから銃で撃たれて、得度できずに人生が終わるという悲しい結末になっています。ギャングでも母のために得度する心がけがあるという映画です。

**山本**●得度とはどのようなものですか。

**平松**●得度とは「在家を捨てて出家する」という意味です。出家の儀式をせずに勝手に出家すると私度僧といって法律違反になりますので、きちんとした儀式を受けないといけません。その式を得度式と言います。

アクション映画の『マッハ!!!』では、「今生では得度して父親に徳を回向する機会が持てなかった」と後悔を口にしながら死んでいく場面があります。主人公を演じた有名なトニー・ジャーではなく助演の人で、ママという有名なコメディアンが演じています。この人が最後に「父親に徳を回向できなかったことが残念だ。そのことを伝えてくれ」と主人公に言う場面があります。このようにアクション映画でも得度して親に徳を回向したいという場面があります。

テレビドラマに『空の如く愛する』という作品がありました。主人公の男性が「空の如く愛する」相手は、恋人でも婚約相手でもなくて自分の母親であることが最後に判明します。母親が大事なので、恋人とも婚約者ともすべて縁を切っていきます。『ホームステイ』でも垣間見られるように、母への愛は至高なのです。『ホームステイ』の原作では最後で母親を突き放している感じがありますが、それに対して、タイ映画の『ホームステイ』では母親との和解が印象に残る仕上がりになっています。

かつて日本でも上映されて話題になったタイ映画の『サラシン橋心中』では、主人公の女性が恋人と自分の腰を紐で結んで橋から身を投げます。真っ昼間に



橋から身を投げるのですが、その前に母親に宛てて遺書を書きます。そこには、「今生では徳が足りずに親孝行できなかったことをたいへん後悔しています。来世ではまたお母さんのもとに生まれて、今度こそお母さんに尽くしたいです」と書かれています。死ぬ直前でも、一緒に死ぬ恋人のことよりお母さんのことが心配で、来世で恋人に会いたいとは書かず、来世でお母さんに尽くしたいと書くのが特徴的です。

**山本** ● 平松さんが紹介した作品には監督がご覧になったことがあるものもあったのではないかと思います。

**パークプム・ウォンプム監督** ● 平松先生のご意見にまったく同感です。タイでは両親をととても大切にしている、お寺に行ってもお坊さんに、「私の世話はいいから家にいる僧侶——両親の面倒をみなさい」と言われます。私が映画を撮るときにもこのような気持ちが根底にあります。

### 『ホームステイ』のドリアンが象徴する 母から子への愛情

**山本** ● 平松さんのお話をうかがっていて、私が『ホームステイ』を観て個人的に気になった、何度か出てくるドリアンの意味が少しわかったような気がしました。ドリアンは、トゲトゲの皮に包まれていて、中にクリーミーな実があって、好きな人はとても好きでクセになる果物ですが、遠慮する人もいるという果物です。

『ホームステイ』では、ミンが子どもの頃に、ミンのお母さんがドリアンのトゲトゲの皮をミンのまわりにごると並べることで、ミンが勝手に出歩かないようにして家事をする場面がありました。そのせいもあって、ミンは大きくなってもドリアンが食べられません。

『ホームステイ』でドリアンが出てくるもう一つの場面では、ミンのお母さんがラヨンからドリアンを持ってきます。ラヨンは果物で有名な場所で、ドリアンが食べ放題のフルーツ・パークがあるそうです。ラヨンには映画のなかでもう一つ別の意味が与えられていて、そこでミンのお母さんがミン以外の人に対して親としての愛情を注ぐという場面があります。

そう考えると、『ホームステイ』では、ドリアンとは母による子どもへの愛情の象徴なのかなと思います。ミンをドリアンの皮で囲んで出られないようにす

るのは、そこだけ聞くと、痛そうなトゲで脅かして逃げられないようにしたとも思えますが、そうではなくて、ドリアンはトゲの部分も含めて母の愛情なんです。だからドリアンの皮で囲んだというのは、円く愛で包んでいるということです。けれどもドリアンはトゲを持っているから、愛が強くなりすぎると子どもはそれを受け入れられなくなって、ドリアンを嫌いだと思ってしまう。だから、お母さんが自分の過剰な愛情を注ぐ先として、別のドリアンがたくさんあるところで愛情を注いでいたということかと思いました。監督にはぜんぜんそんな意図はないと思うんですが。(笑)

**パークプム・ウォンプム監督** ● 私は山本先生の解釈はとても好きです。(笑)

**平松** ● いまの山本さんの話に関連して、『ホームステイ』のなかで、ドリアンを食べて、子ども時代の母親の温かい思い出が蘇るという演出があります。日本で言うおふくろの味をドリアンに感じるという主人公の思い出の描き方がすばらしい編集だと思いました。

### 日本映画『カラフル』の影響と 日本とタイとの死生観の違い

**山本** ● ここから質疑応答に移ります。パークプム監督もしくは平松さんに訊ねたいことや伝えたいことがありますたらお願いします。『ホームステイ』の映画に関してでもいいですし、タイの映画全体についてもいいですし、今日のお話についてでもけっこうです。

**フロア1** ● 日本で3人の監督が『カラフル』の映画を作っていますが、監督はご覧になりましたか。

**パークプム・ウォンプム監督** ● アニメーションは観ましたが、実写版は観ていません。

**フロア1** ● 『ホームステイ』を撮る際に、日本の『カラフル』をどこか参考にしましたか。

**パークプム・ウォンプム監督** ● アニメーションを観たときに、小説のイメージがすべて揃っていると思いました。ですから、こういう表現をするとこんな感覚がわかるのかということ参考にして、お手本にしました。まねしたというわけではないですが、『ホームステイ』で挑戦をするときにとても参考になりました。

**フロア2** ● 原作を読んでいないのでよくわかりませんが、タイの方と日本人とでは死生観がかなり違うような気がします。タイの友だちと話をすると、「来世を信じている」とか「魂を信じている」というこ

とを日常的に言いますが、日本人は、おそらくこの人生だけで終わりだと考えていると思います。そうした違いをどのように考えてこの映画を作られたのかなと思いました。

**パークプム・ウォンプム監督**●タイでは、子どものころから仏教の教えとして「今生でこんなことをすると来世でこうなる」という話をずっと聞いています。でも、最近では来世を信じている人は減ってきていると思います。来世を考えることは、自分の人生に気をつけるという意味でとてもいいことだと思います。現世でしたことが来世で返ってくると思うと人生に気をつけるようになると思います。ただし実際にそうなるかどうかはわかりません。

**平松**●タイでは来世を信じていますし、普通のタイの人にとっては、今生で徳を積んで来世で天上界に生まれ変わるというのが最大の願いです。出家者は悟りを開いて輪廻の世界から解脱するのが一番の目標ですが、一般の人は、できるだけ徳を積んで、来世では天人あるいは天女になって、天上界で「サバーイ、サバーイ」の人生を歩むことが目標になっているのではないのでしょうか。

**パークプム・ウォンプム監督**●仏教ではそのように教えられています。ただし個人的には、徳を積んで貯めておくことは、自分のために銀行に貯めておくような感覚を覚えます。子どもを助けるのも、現世で自分の徳を積んで来世のためというのですが、本当なのかなという葛藤が私の中であって、来世に対する思いは私の中ではだんだん減ってきています。

**山本**●来世のためと言うことが今生をよく生きることになるということは、先ほどの話にあった「この1回の人生のために生きる」という話と重なっているように思います。その意味で、日本とタイが近くなっていると見ることもできるのかなと思いました。

### タイの若者の自死理由 ——失恋、親との不和、成績不振

**フロア3**●タイで若者の自殺の理由でもっとも多いのは何ですか。

**パークプム・ウォンプム監督**●私が読んだものなかで、自殺の理由として最初に来るのは失恋でした。次が家族と喧嘩したという理由です。両親と喧嘩したとか、テストの点数が悪くて親に責められたとかいう

のが多い理由です。

最近読んだ情報では、ビルからの飛び降り自殺があって、その原因はテストの点数が悪かったからというものでした。なぜか3月から5月がもっとも自殺が多くて、不思議だなと思います。

**山本**●学校の成績が悪いからというのは、親の期待に応えられないからと解釈すれば、広い意味では親との関係になります。失恋をしたから自殺するというのは、失恋すると親に申しわけないから、つまり結局は親との関係ということでしょうか。それとも、親は関係なくて、自分と恋人とのあいだの関係で悩んで自殺するというのでしょうか。

**パークプム・ウォンプム監督**●両方の理由があるのですが、どちらかと言うと恋人との関係に悩んで自殺するのが多いようです。

### 知名度ではなく 演技力と熱意で選んだ二人の主演

**フロア4**●映画『ホームステイ』で、なぜ主人公にこの二人を選んだのか教えてください。

**パークプム・ウォンプム監督**●ミン役のジェームズ・ティーラドン・スパパンピンヨーは、『バッド・ジーニアス』ですごく嘘つきの演技が上手で、はっきり言って嫌いでした。(笑) だけど、最後の最後に人に薦められてオーディションに来てもらったなら、すごく演技が上手だったし、すごく熱意がありました。はじめは薦めた人に「いや、ジェームズにできるわけじゃないか」と言っていたのですが、考えを改めました。

ヒロインを演じたチャープラン・アーリークンは、たまたまフェイスブックでかわいい娘の写真を見つけて、脚本に描いていたヒロインのキャラクターと合っていたので、オーディションに呼んでもらいました。BNK48という日本に関連するグループに属していることはまったく知りませんでした。キャスティング・ディレクターから「あの娘、知っている？ いますごく有名になってるよ」と言われたのですが、知らないと答えました。演技がとてもよかったし、熱心に演技をしてくれたので、私たちにとってはラッキーでした。撮影しているうちにだんだんスーパースターになっていったのもラッキーだったと思います。彼女は自分が映画に出ることを秘密にしておいてくれました。撮影の途中でジェームズとチャープランの2ショッ

トの写真を撮ろうとしたら「だめ」と言われて、仕事なのになぜだめなのかと思いましたが、後になってBNK48はアイドルだからだめなんだと気づきました。

### 「すべてのものが永遠ではない」という 人類普遍の要素を表現した『ホームステイ』

**フロア5** ●GDHについてうかがいたいと思います。GDHの映画にはおもしろい作品が多くて、タイ映画らしさもあると思いますが、『バッド・ジーニアス』の監督はあの映画をハリウッドへのラブ・レターだと言っているそうで、ハリウッド的なものが入って非常におもしろい作品になっているのでしょうか。先ほど日本の『リング』の影響なども話されていましたが、そのあたりについて監督の工夫を聞かせてください。

**パークプム・ウォンプム監督** ●まず、GDHの映画をおもしろいと思ってくださってありがとうございます。今回の映画は日本の小説を映画化していますが、そういった映画はこれまでタイ映画ではなかったのだからこそ挑戦してみたいと思いました。脚本を執筆するときに、日本の習慣をタイの習慣に置き換えました。最初は難しくないと思っていたのですが、すごく難しかったです。それから、小説の肝になる部分は、なるべく落とさないようにして、そのうえで愉しめる映画にしたいと思ったので、すごく時間がかかりました。

でも、結局どんな人でも、どの国の人であっても、必ず人間が共有できる普遍的なことはあると思います。先ほど平松先生から仏教の視点をご指摘いただきましたが、制作したときそういうことはまったく考えていませんでした。ですが、仏教では人生は仮のものというのが真実です。自分自身も永遠ではないし、きょうだいも永遠ではありません。そのような真実を映画に描きました。

**フロア6** ●『ホームステイ』は本当におもしろかったです。題名が『ホームステイ』になっていることについて、原作を読んでなるほどと思って、映画を観たら本当によくできている、題名も合っていると思いました。題名はどのようにしてつけられたのでしょうか。

**パークプム・ウォンプム監督** ●「ホームステイ」という言葉は小説のなかにあります。さまよえる魂が体の中にホームステイしているという言葉があるので、その言葉をタイトルにしました。

### 若い男女の世界を描くGDH作品のねらいと GDH以外のタイ映画の制作状況

**フロア7** ●『ホームステイ』はまだ観ていないので印象論的な質問になってしまうのですが、GDH作品では『バッド・ジーニアス』など若い男女を描くところに映画的な魅力を作っている印象があるのですが、タイ映画としてそういう流行があるのでしょうか。GDHがそういう方針なのでしょう。今回の映画を観ていないので想像になってしまうのですが、そういう若い男女の一瞬の輝きみたいな、そこに映画的な魅力があるのかなと思ひまして、そのあたりをうかがいたいと思います。

**パークプム・ウォンプム監督** ●GDHの映画は、いつも若者が主役というわけではありません。高校生を描く作品が多いのは、タイで映画を観る層が若者だからです。それに、GDHの監督は若い人が多いので、高校生のときの気持ちをまだ忘れていないんです。若者が主役だとたくさんの人に届くという理由もあります。

ただし、最初から若者にしようと絞っているわけではなくて、どんな役者を選ぶか考えた結果として若い役者になっているだけです。

**フロア8** ●いまの質問に若干重なるかたちになりますが、ぼくがタイ映画を観るときは、最近タイにはあまり行けていないので、外国の映画祭とか、台湾で観ることがすごく多いです。そうすると、観る作品はいわゆる映画祭向けのインディペンデント作品かアート・ムービーか、さもなければ、劇場で観るのはGDHの作品あるいはGDHっぽい作品ぐらいなんです。それ以外のタイ映画も当然あるはずだと思っているのですが、外国だとなかなか観ることができません。現在のタイ映画界、映画マーケット、映画業界のなかで、先ほど言った以外の作品の占める位置とか存在感がどんな感じか教えてもらえればと思います。

**パークプム・ウォンプム監督** ●タイでは映画の制作本数自体が減っています。ですが、インディーズ映画であれば、海外に出て行って、たとえばカンヌや釜山などで賞を獲っているの、けっこう育ってきています。インディーズ映画はだいたいタイ国内の映画祭で受賞しているのですが、他の映画は海外でなかなか上映することができないので、支援が足りないなど感じています。海外の映画祭ではいくつか観られると思います。





GDHの作品であっても、海外で必ず観られるというわけではなくて、買ってくれる人が来るのを待っています。他の国で上映するときにはインディーズ映画扱いだったりします。それ以外の映画は、1週間とか2週間とか、タイの映画ビジネスの都合で短い期間しか上映されない作品があります。

最近、タイの国内の大きな映画賞で、インディーズ映画の監督が受賞スピーチでタイ政府はインディーズ映画をまったく支援してくれないと発言したことが話題になりました。制作資金を援助してくれないということではなく、映画の権利などの保護についてのことです。

### 花火、赤い飲み物、シマウマの置物、シャンプーが象徴するもの

**西芳実** ●『ホームステイ』はとても心打たれる作品でした。二つ教えてください。

一つは、花火のシーンがとても印象的だったのですが、そもそもタイではどのようなときに花火をあげるのでしょうか。日本だと、花火は夏のお祭りとか、お祝いがあったときに祝砲のようにあげるイメージがありますが、タイで花火はどのようなときにあげるものかを教えてください。

もう一つは、ミンがお供え物の瓶に入った飲み物を飲んでしまう場面がありました。字幕がパッと出ただけで消えてしまったのでうる覚えですが、精霊の何とかという台詞がありました。お供え物を飲んでしまう

ことと、精霊が出てくることと、そのときのパイの反応をどう理解したらいいのかわからなかったのを教えていただけたらと思います。

**パークプム・ウォンプム監督** ●まず花火ですが、タイでも他の国と同じように、お祝いのときにあげることがあります。王様の誕生日やローイクラトンというお祭りでも花火をあげます。

祠の前にあった赤い飲み物については、タイの習慣では、小さな器に食べ物を入れて精霊へのお供え物として置いていたのですが、最近では赤い飲み物をお供えするのが流行っています。とくに商売人は、赤い飲み物を祠の前に置いてお祈りするのが好きです。だから赤い飲み物は精霊に捧げるお供え物なんです。あのシーンでミンが赤い飲み物を飲むことは、彼がさまよえる精霊であることを示しています。祠で人間が赤い飲み物を飲むことはないの、ヒロインはそれを見てすごく戸惑います。あれはある意味ジョークで、実際には祠で赤い飲み物を飲むことはありません。

それから、祠にシマウマの置物が置いてあります。シマウマはアフリカの生き物なのでタイにはいませんが、あるとき誰かが祠にシマウマを置いたらそれが受けて、みんなだまねして置くようになったので、そのことを映画にも取り入れました。

**山本** ●お供えの飲み物を飲んでパッと吹き出してしまう場面で、吹き出したものがパイの顔にかかってしまうのは、間接的にキスをしているシーンの描き方かなと思ったりしました。

ついでに聞きたいのですが、頭をシャンプーして走るシーンがあります。あれはタイで一般的なことですか、それともこの映画のなかだけのことですか。

**パークプム・ウォンプム監督**●この映画だけの特別なエピソードです。神様にお願いをするときには、成就した際のお礼に変わったことをすると約束すればするほど願いが叶うと信じられています。髪の毛をシャンプーするエピソードは、『心霊写真』と一緒に共同監督した人から、大学の合格祈願が成就したお礼に頭にシャンプーをつけて校庭を走ったという話を聞いて、これはいいなと思って取り入れました。夜中の12時に走れば誰も見ていないと思ってシャンプーをつけて走ったら、王室行事があって人がとてもたくさんいて、この人バカじゃないかという目で見られたそうです。(笑)

### 忘れたい映画は 『羊たちの沈黙』と『恋する惑星』

**フロア10**●塾を休んで映画ばかり観ていたとおっしゃったのですが、監督がその当時観ていた映画はどんなものが多かったのかということ、監督が個人的に忘れたい映画があれば、数本でも教えていただければと思います。

**パークプム・ウォンプム監督**●ランダムに観ていました。タイ映画が上映されていたらタイ映画を観ましたし、欧米の映画もくまなく観ました。欧米の映画で、オスカー賞のたくさんの部門を受賞した映画があったのですが、そのときは「オスカーって何」と思っていました。『羊たちの沈黙』というハリウッド映画で、この映画を観たときに私はまったく内容がわからなかったけれど、頭の中にその映像が残っていて、家に帰ってからももっと理解したいと思いました。観た後に何かを見つけないかと思うことが映画の魅力なのだと思います。

大学で映画を専攻するようになってから、大学の近くのレンタル・ビデオ屋でAからZまで全部借りました。大学のときに好きだった映画でいまでも忘れられないのは『恋する惑星』という映画です。

**山本**●今日のシンポジウムは、世界中の映画を観ているパークプム監督と、タイ映画を全部観ている平松さんのお話ということになりました。(笑)

### 私たちに寄り添う天使としての友人の存在を 教えてくれる『ホームステイ』

**山本**●最後に私の『ホームステイ』の感想を紹介させていただきたいと思います。今日は主人公のミンとパイが中心で紹介されましたが、私はもう1人の登場人物のリーがとても気になりました。ミンに寄り添ってミンを助けるのですが、ミンにつれなくされます。ミンの遺書にリーの名前が書かれていなかったからリーはミンにとって大切な人ではなかったんだと言われたりして、かなり冷たく扱われます。でも、じつはリーはミンにとって大事な存在なのではないかなと私は思います。

もう一度観る機会があればぜひ観てほしいのですが、注意深く見ていると、リーはミンとしか絡んでいなくて、ミン以外の登場人物とは絡んでいません。ということは、リーはミン以外の人には見えていないのかもしれませんが、監督の意図としてはみんなにちゃんと見えているのかもしれませんが、そういう解釈も成り立つかなと思いました。

『ホームステイ』には、空から来て、ときどきミンのところにいて、こうしなさい、ああしなさいと、姿を変えて現れる存在がいます。日本語では監視人あるいは天使と呼ばれますが、自分のことをガイドと名乗っています。それとは違うけれど、じつはリーも天使の一人で、自分の正体を明かさずにミンに寄り添って、ときどきミンをガイドしているということなのかなと思いました。

さらに想像を逞しくすると、この物語では天使はミンだけに寄り添っていますが、もしかしたら私たちの周りにも、私たちは普通の友だちだと思っているけれどじつは天使がいて、私たちが知らないところで助けの手を差し伸べてくれているのかもしれませんが。そういう存在が私たち一人ひとりにはいるんですよということを伝えてくれる映画なんだなと思いました。監督の意図とは違うでしょうけれども、映画はいろいろな見方ができるのがおもしろいので、そういう楽しみ方もあるかなと思いました。

さて、終わりの時間が近づいてきましたので、最後に今日のお話を振り返って、平松さんとパークプム監督からそれぞれまとめの言葉をいただきたいと思います。

### 人生の真実を描いた『カラフル』の 三重の生まれ変わりを体現する『ホームステイ』

平松●『ホームステイ』は、主人公の生まれ変わりを題材にした映画であるとともに、日本の原作がタイの社会の文脈に沿って見事に生まれ変わった作品でもあります。さらに、タイ映画の流れのなかで新風を巻き起こすような、新しい生まれ変わりをした映画でもあります。そんな三重の生まれ変わりの映画であるとあらためて感じました。タイ映画を引っ張っていく監督の今後の作品に大いに期待しています。

パークプム・ウォンプム監督●今回大阪アジア映画祭に映画を持っていくことができ、また本日シンポジウムでこのようにお話しさせていただくことができ、とてもうれしく思っています。『ホームステイ』は、日本人のとてもよい考え方、人生の真実をととても美しいかたちで表した小説です。このすばらしい話を私が映画化できて、さらに世界の方がたに観ていただけることをとてもうれしく思います。

また、日本人とタイ人のコラボレーションでもあって、その結果を日本の観客の方にも観ていただけたことを本当にうれしく思っています。本日はみなさま、そして先生方、ありがとうございました。

### 映画を観て登場人物の人生を体験することが 魂の救済の契機となる

山本●『ホームステイ』は、死んだ人の魂が別の人の体に一時的にホームステイするというお話でした。考えてみると、映画を観るということは、観た人が映画の登場人物に自身を投影して映画を愉しむ、つまり登場人物になりきってその人生を体験するということです。その意味では「魂のホームステイ」と言えるかもしれません。

他人の人生を体験していると思っても、そこに何らかの形で自分の人生が投影されていることがあります。映画を観ているあいだ登場人物にホームステイすることが自分の魂の救済につながるということが映画体験の一つだと思います。シンポジウムのタイトル「生まれ変わるタイ映画——魂のホームステイと救済」につながるような、映画体験についてあらためて考えさせてくれた『ホームステイ』のすばらしさを感じました。

本日はシンポジウムにご参加くださりましてあり

がとうございました。パネリストのみなさん、フロアでご参加くださったみなさんに御礼申し上げますとともに、主催組織の一つである混成アジア映画研究会を代表して、主催組織の大阪アジア映画祭と京都大学東南アジア地域研究研究所、そして毎年すばらしい会場を提供してくださっている国立国際美術館に篤く御礼申し上げます。